
河野裕一の事件簿！ 3殺目

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

河野裕一の事件簿！ 3 殺目

【Nコード】

N 6 1 8 8 A

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

裁判に掛けられた事件。裁判所で起きた事件。そしてその帰り道・
・。

闇夜の殺人（前書き）

評価で本人を騙る紛らわしい行為はしないで下さい。

闇夜の殺人

AM・2:00。

とある一軒家。

此処で一人の男性が殺害された。

被害者は浅沼 正治28歳。

生前は怨まれる様な事は無かったと言う。被害者は胸に凶器のナイフを刺された状態で倒れており、死因は心臓損傷による心停止だと言う事が解った。

また、第一発見者の証言では、現場から逃げる怪しい男を見たと言う。

そして、捜査線上にある男が上がった。

男は、浅川 昭二40歳。

生前の被害者とは仲が良かったと言う。

浅川は、事件のあった日、現場に入ったと言う。

だが、被害者が留守だったので帰ったと言う。

裕一は、現場を観察した。

現場は、玄関から一直線にリビング。

更に真っ直ぐ進むと鏡が置いてある。

そして、被害者が倒れていたのは、リビングに入って右に折れた所である。

警察の調べでは凶器から浅川 昭二の指紋が見つかった。

警察は浅川を即逮捕した。

理由は第一発見者の目撃証言と凶器から指紋が上がったと言う決定的な証拠からだった。

裕一：「親父、今回の事件って、裁判になったんだよね？」

裕二：「ああ・・・」

だけど、心配な事があるんだ。

頼む、もし暇なら明後日の裁判で、三上弁護士を援護してやってくれ。」

裕一：「な、何で俺が？」

裕二：「いや、今回の事件・・・証拠が揃いすぎてるんだ。

もしかすると、三上弁護士が負けるかもしれない。

観客席から良いから彼を援護してやってくれ。」

と言う訳で、裕一は暇をもてあまして裁判所に行く事にした。

事件の真実

裕一は裁判所に来ていた……。理由は、父親に頼まれたからである。

○月×日土曜日AM・10:00。

裁判所にて裁判が始まる……。

裁判長：「それでは、これより第一法廷を始めます。

弁護士、検事、準備は宜しいですか？」

な、何だ、この「逆○裁判！」風な裁判は！？

検事：「うむ。」

弁護士：「弁護士は準備出来ています。」

検事：「三上弁護士。」

言っておくが、今回は絶対に負けないぞ。」

三上弁護士：「……………」

弁護士は呆れていた……。

裁判長：「それでは三谷検事、冒頭弁論をお願いします。」

三谷検事：「うむ、被害者は浅沼 正治^{せいじ}28歳。

……………」

と、冒頭弁論を続ける。

三谷検事：「と言う訳で、被告人の浅川 昭二^{しょうじ}を入廷させる。」

裁判長：「それでは被告人を入廷させて下さい。」

すると、被告人の浅沼氏が入廷してきた……。

風貌はそこらにいる中年の親父なんら変わりはない……。

裁判長：「被告人は名前と職業を言って下さい。」

昭二：「浅川 昭二40歳。

職業は土木作業員です。」

三谷検事：「裁判長、ここで凶器のナイフを証拠品として提出させて貰う。」

三谷検事は証拠品のナイフを提出した……。

ああ、完全に「逆転。判！」だな・・・。

裁判長：「うむ、受理致しました。」

検事の提出した証拠品には、被告人の指紋が付いていた・・・。
これは、逃れようの無い事実である・・・。

三谷検事：「被告人、このナイフはあんたので間違いないか？」

三上弁護士：「待った！」

誘導尋問です。」

裁判長：「質問を却下します。

検事は質問を変えて下さい。」

三谷検事：「むむむ・・・。」

被告人、このナイフにはあんたの指紋が付いていた・・・。
これはどういう事だ？」

しかし、昭二は「知らない」との一言。

そりゃあそうだろうな・・・。

三谷検事：「では、被害者の浅沼 正治が殺害されたAM・2：00頃、どこにいたかを証言して貰おう。」

裁判長：「被告人、証言して下さい。」

被告人は、「現場へ行った」と証言した・・・。

おいおい、それじゃ不利じゃないか・・・。

三谷検事：「ふっ、やはりな。

裁判長、被告人は殺害時刻に現場へ行っている・・・。
有罪で決まりだ。」

三上弁護士：「待った！」

弁護人には尋問をする権利があります。

尋問させて頂きます。」

裁判長：「それでは尋問をお願いします。」

弁護人は、尋問を始めた。

三上弁護士：「被告人、先ほどのAM・2：00に現場へ行っ
たという証言は間違いありませんか？」

昭二：「はい、間違いありません。」

三上弁護士：「では、その時の現場の様子を証言して下さい。」

被告人は、「被害者の姿は無かった」と答えた・・・。
姿が無かった・・・という事だ？

三谷検事：「被告人、私はその様な事は一切聞いておらんぞ！？」

裁判長：「被告人、証言はしっかりお願いします。」

昭二：「私はあの時間、浅沼の部屋へ行きました。
でも、浅沼はいなかったんです。」

浅川はそう証言しなおした。

三上弁護士：「その後はどうしましたか？」

昭二：「帰りました。」

三上弁護士：「間違いありませんか！？」

三谷検事：「待った！」

被告人は嘘を吐いている可能性もある・・・。

これ以上の尋問は不要だ・・・。

証人の古川 実^{みのる}を入廷させる。」

すると、証人の古川が入廷した・・・。

裁判長：「証人、名前と職業をお願いします。」

実：「古川 実、23歳。」

職業は新聞配達員です。」

裁判長：「では、事件当日に目撃した事を証言して下さい。」

実：「あれは、一昨日の晩の事です。」

僕が夜中に配達をしていると、妙な男が部屋から出てきたんです。

その男は、ドアを半開きの状態で去って行きました。

気になったので中を覗くと、人が胸を刺されて死んでいるではありませんか。

恐ろしくてその場から動けませんでしたよ。」

動けなかった？

動けなかったのに何故、通報が出来たのだろうか？

三上弁護士：「異議あり！」

裁判長、事件のあった現場の上面を見て下さい。」

裁判長は上図を確認した。

上図では、玄関から被害者の倒れていたリビングまで真っ直ぐだが、倒れていた位置は玄関からは見えない……。

因みに、玄関から真っ直ぐ進むと、突き当たりに鏡がある……。

裁判長：「これがどうかしたのかね？」

三上弁護士：「この上図の通りに解説すると、玄関から被害者が倒れているのは確認出来ない筈。

なのに、どうして証人は被害者が倒れているのを確認出来たのか？」

三谷検事：「異議あり！」

現場には鏡がある。

その鏡に被害者の姿が写ったのだ。」

三上弁護士が悩んでいた……。

そこへ、観客席から「異議あり！」との声が聞こえた。

その主は裕一だった。

裁判長：「観客席はお静かになさい。」

と、裁判長が言ったが、裕一は聞き入れなかった。

裕一：「この事件の現場を担当したのは僕です。」

三谷検事、貴方は実験したんですか？

玄関から正面にある鏡を覗いて遺体が見える事を？」

三谷検事：「な、何言っただね君は！？」

裕一：「三谷検事、現場にあった鏡では遺体を見る事は不可能なんですよ？」

だが、一人だけそれを見る事が出来た人物がこの中にいる……。

それは犯行時刻に現場にいた古川さん、貴方ですよ！

僕は彼を殺人容疑で告発します！」

回りが騒ぎ出す……。

裁判長：「静粛に！」

面白い、続けなさい。」

裕一：「三谷検事、鏡の見える範囲を知っていますか？」

鏡と言うのは、離れれば離れるほど光を反射する範囲が狭くなり、

近づけば近づく程範囲が広くなります。

つまり、古川さんが遺体を見る為には、鏡にかなり近づかなければなりません。

そう、部屋の中に入り、鏡の目の前に行かなくてはね。

古川さん、貴方はさつき『怖くてその場を動けなかった』と証言しました……。

現場から動けなかった貴方が何故に遺体がある事に気づいたんですか？

まだまだあります。

遺体の状況です。

先ほど説明した通り、玄関から被害者の倒れている位置は見えませんが。

では、何故に胸にナイフが刺さっている事が解ったんですか？」

昭二：「俺が殺したんだ……。」

三谷検事：「証人！？」

証人は、全ての犯行を自供した。

彼は、被害者の自宅に盗みに入っただのは良いが、被害者が帰って来てしまい、焦った犯人はとっさに台所にあったナイフで被害者を刺してしまったと言う事だ。

三谷検事：「さ、裁判長……。」

判決を……。」

裁判長：「被告人、浅川 昭二に判決を言い渡しましょう……。」

裁判長は被告人に「無罪！」を言い渡した。

裕一は、その場を後にした……。

三上弁護士：「きみー、待ってくれ。」

と、弁護士が裕一を止めた。

三上弁護士：「さつきは助かったよ。」

僕、もう本当に駄目かと思った……。」

裕一：「いや、僕はただ親父に貴方を援護しろと頼まれただけでし

て・・・。」

三上弁護士：「親父さんって誰？」

裕一：「本庁捜査一課の警部ですが？」

三上弁護士：「じゃあ、君があ有名な名探偵の？」

裕一：「河野 裕一です。」

三上弁護士：「でも、探偵なら何故に裁判になる前に解決しなかったんだい？」

裕一：「証拠が揃いすぎていたんですよ。
だから裁判に持ち越したんですけど・・・。」

三上弁護士：「けど？」

裕一：「古川さんの証言でピンと来たんですよ。
ほら、現場には鏡がありましたよね？」

あの鏡、幅が狭いから離れたところでは広い範囲が見えないんです。

「

三上弁護士：「そうか、だからあの人が犯人だって・・・。」

ああ、あんな矛盾にさえ気づかなかった僕はいったいどうしたら・・・。」

落ち込んでしまった・・・。

裕一：「お、落ち込まないで下さい。

この次は自分の力で勝てますって！」

三上弁護士：「慰めてくれてありがとう・・・。
少し気分が楽になったよ。」

弁護士は、そう言い残してその場を去った。

某時刻・・・。

法廷控え室。

三上弁護士は控え室でくつろいでいた・・・。

三上弁護士：「（はあ、この後は婦人警官の弁護か・・・。
大丈夫かな・・・。）」

その時だった。

何者かが三上弁護士を金属バットで殴りつけた。

「ボグッ！」と鈍い音が聞こえたと同時に、三上弁護士はその場に倒れ息絶えた・・・。

何者かは、金属バットを置いて現場を立ち去った・・・。

裁判所内殺人事件

裕一が帰ろうとすると、「キヤー！」と言う悲鳴が聞こえた。

悲鳴は、法廷控え室の方から聞こえた……。

裕一は、控え室に向かった……。

すると、1人の女性が驚き戸惑っていた。

裕一は、何があつたのかを尋ねた。

女性は、指を差しながら言った……。

女性：「三上弁護士が亡くなっている……。」

な、三上弁護士が死んでるだとい？

裕一は、女性の指差す方向を眺めた……。

そして、裕一の目に飛び込んだのは、紛れもなく三上弁護士の遺体だつた……。

裕一は、女性に警察を呼ぶように頼んだ。

すると、女性は「自分が警察です」と言った。

裕一は、「そうですか」と言いながら遺体を調べた。

遺体は、後頭部を強打していた……。

死因は後頭部強打による頭蓋骨陥没……。

凶器は現場に落ちていた金属バットだと思われる。

その証拠に、凶器には被害者の血痕が付着していた。

裕一は、第一発見者の女性に名前と発見当時の状況を聞いた。

女性は「児山^{こやま} ミチル」と名乗った。

小山は、次の裁判で三上弁護士が弁護する筈だつたと言う……。

待て、その前に何の弁護だ？

裕一は何の弁護かを尋ねた。

すると、児山は自分が付き合っていた彼を殺害してしまったと言う疑いが掛かった為、その弁護を三上弁護士がする筈だつたと言う。だが、それをする筈の弁護士は何者かの手によって命を奪われてしまったのだ……。

これではどうする事も出来ない。

ミチル：「あの、代わりに私の弁護を勤めて下さいませんか？
えっと・・・。」

裕一：「河野 裕一、探偵です・・・。」

でも、僕なんかが弁護をしても宜しい物なのでしょうか？」

裕一はどうしたら良いか分からなかった。

ミチル：「貴方、探偵とおっしゃいましたよね。」

三上弁護士が亡くなった今、頼れるのは貴方しかいないんです！」

裕一：「そ、そこまで言うなら、お引き受けしても良いでしょう・・・。」

ミチル：「ありがとうございます。」

では、法廷でお会いしましょう。」

裕一は、亡くなった三上弁護士の代わりに児山の弁護を勤める事になった。

裕一は、裁判が始まるまでに三上弁護士の遺体を調べた。
すると、ポケットから事件の資料が出てきた。

○月○日○曜日

被害者 高田 光則 みつのり

死亡推定時刻 PM・3：00

凶器 無し

死 因 崖からの落下による物

容疑者 児山 ミチル

動 機 不明

第一発見者 辛島 俊之 としゆき

現場状況 現場には「小山」とメッセージが残されていた。

裕一：「（これだけあれば弁護は十分だろう・・・。）」

裕一は、警察に電話をし、三上が亡くなった事を告げた後、法廷に立った。

裕一が弁護士！？三上弁護士殺害事件の真実！

P M . 1 : 0 0、地方裁判所第一法廷。

裁判長：「これより、被告人兇山 ミチルの裁判を行います。
ん・・・・・・・・・・。」

三上弁護士はどうなさいました？」

裕一は、三上弁護士が殺害された事を告げた。

そして、自分が代わりに弁護を勤めると言う事も話した。

裁判長：「なんと、三上弁護士が亡くなられた！？
いったいなぜ？」

裕一：「何者かによつて殺害されたんですよ。」

裁判長：「それで、弁護士でもない君が弁護を勤める事になったと
？」

裕一：「そう言う事です。」

裁判長：「成る程、分かりました。

弁護を許可致しましょう。

それでは、裁判を始めたいと思います。

三谷検事、辩护人、準備は宜しいですか？」

三谷検事：「準備は出来ている。」

裕一：「・・・・・・・・・・。」

裁判長：「辩护人、準備は出来ていないのですか？」

裕一：「で、出ています。」

裕一は正直焦っていた・・・。

本当に弁護が勤まるのだろうか・・・。

裁判長：「三谷検事、冒頭弁論をお願いします。」

三谷検事：「事前に事件資料を渡してある。

冒頭弁論など必要ない。

そう言う訳だから早く証人を入廷させたまえ。」

裁判長：「そ、そうですか。」

では、証人を入廷させましょう。」

証人が入廷した。

裁判長は証人に名前と職業を要求した。

証人は第一発見者の辛島 俊之。

辛島は大学生である……。

裁判長：「証人、事件当日の事を証言して下さい。」

俊之：「あの日、僕は現場である公園で落とした携帯を探していました。」

そしたら見てしまいました。

現場で女性が被害者を突き落としたのを……。」

三谷検事は現場の写真を提出した。

写真は中央に遺体。

その奥には電話ボックスと時計が立っていた。

また、死体の下に何かの欠片かけらが見える。

裁判長：「証人はその後何をしましたか？」

俊之：「30分程電話を探して歩き回りました。」

裁判長：「成る程……。」

裕一：「異議あり！」

証人、貴方は電話を30分間歩き回って探したと証言しました……。

でも、電話ボックスなら目と鼻の先にあつたじゃないですか!？
何故それに気づかなかったのですか？」

三谷検事：「異議あり！」

証人は目が悪かったんだ。

だから気づかなかった。

それだけの事だ。」

な、何か巧く流された様な……。

三谷検事：「弁護士、そこまでの様だな……。

裁判長、被告人に判決を。」

裕一：「(こ、このままではまずいな……。)(」

裁判長：「それでは、被告人兇山 ミチルに判決を言い渡します。
・・・・・・・・・・・・・・・・」

有罪！」

そこで、裕一はある事に気が付いた。

裕一：「い、異議あり！」

裁判長：「べ、べ、弁護士！？」

どうなさいました？

もう判決は出ていますよ。」

裕一：「たった今解りましたよ。」

辛島さん、貴方が被害者の高田さんを殺害したと言う事がね！」

裁判長：「な、何と！？」

そうなんですか？」

三谷検事：「な、何をいきなり？」

裕一：「三谷検事・・・」

事件の資料をもう一度確認して下さい。」

三谷検事は事件資料を確認した。

裕一：「何か気づきませんか？」

例えば、現場に残された『小玉』と言う字と被害者の『兇玉』と言う字が違うとか。」

三谷検事：「た、確かに字が違う・・・」

だが、それはきっと被害者が解りやすくするのに『小玉』と残したのだろう。」

裕一：「辛島さん、貴方は現場で落とした携帯を探していたと言いましたが、結局それは見つかったのですか？」

俊之：「ああ、見つかったよ。」

裕一：「では、その電話を拾う前に、携帯に電話を掛けましたか？」

俊之：「あ、ああ、掛けた。」

裕一：「その電話に誰かが応答したと言う事は？」

俊之：「あった。」

裕一：「その人の名前は？」

俊之：「小山 ミチル……。」

回りが騒ぎ出す……。

裁判長：「静粛に、静粛に！」

と、「カン、カン」と言う音を立てながら言う。

裁判長：「此処へ来て、事態は急展開を見せました。」

裁判長は暫く悩んだ……。

そして。

裁判長：「さて、弁護人は証人が被害者を殺害したとの事ですが、その根拠はありますか？」

裕一：「根拠はあります！」

それは、メガネです！

証人は、目が悪いと言う事ですが、目が悪いとなると当然メガネが必要になりますよね？

証人は現在メガネを持っていますか？」

三谷検事：「異議あり！」

その質問は事件には何の関わりもない。」

裁判長：「弁護人、その質問は事件と関係あるのですか？」

裕一は頷く。

裁判長：「では証人、答えて下さい。」

辛島は「例の公園で落としてしまい、持っていない」と答えた。

裕一：「裁判長、もうお分かりですね。」

彼は、現場で被害者と会った。

そして、口論となり被害者を殺害した。

その直後、自分を疑いの目から遠ざけようと、わざと現場に『小山』と残したのです。

だが、ここで彼はミスをしてしまった。

それは、被害者を突き落とす際にメガネを落とした事と、被告人の苗字と現場の小山と言う字を書き間違えてしまったと言う事です。」

俊之：「そんなの根も葉もない嘘だ。」

裁判長：「その通りですよ。」

弁護人にはペナルティーを与えます。」

裕一：「その必要はありません。」

裁判長、もう一度現場の写真を確認してください。」

裁判長は、現場の写真を確認した。

裕一：「では、死体の下をご覧下さい。」

裁判長は死体の下を確認した。

裁判長：「何か欠片の様な物がありますね・・・。」

裕一：「裁判長、これはメガネの欠片です！」

裁判長：「な、何ですと!？」

回りが騒ぐ・・・。

裁判長：「せ、静粛に！」

三谷検事：「ふつ、ばかばかしい。」

そんな物、何の証拠にもならない。

それに、その欠片がメガネと決まった訳では無い。」

確かに、現段階では決めつける事は不可能・・・。

だが、それを覆す事は可能だろう・・・。

俊之：「ふつ、自信たっぷりだったのになあ。」

裁判長：「しよ、証人!？」

貴方は全ての罪を認めるのですか!？」

俊之：「ああ、認める・・・。」

辛島が全ての罪を認めた・・・。

裕一：「辛島さん、最後にお聞きしても宜しいですか？」

俊之：「何だ？」

裕一：「控え室で三上弁護士を殺害したのは貴方ですね？」

裁判長：「べ、弁護士!？」

それはどういう事ですか!？」

裕一：「こういう事ですよ・・・。」

辛島さん、貴方は携帯を拾ったと言ったが、実は拾ったのでは無い。

三上弁護士が持っていたから奪い取ったのです。

金属バットで三上弁護士を殺害してね!」

俊之：「そ、そんな筈は！？」

お、俺はただバットで殴って気絶させただけだ！

殺してなんかいない！」

裕一：「殴った事は認めるんですね？」

俊之：「ああ、それは認める。」

だが、殺してはいない。」

三谷検事：「証人の言う通り……。

いや、何でもない。」

裕一：「三谷検事……。

三上弁護士を殺害したのは貴方だったんですか。

裁判長、僕は三上弁護士を殺害した事より三谷検事を告発します！」

裁判長は聞きながら固まっていた……。

三谷検事：「な、何の証拠があつてそんな事を？」

裕一：「三谷検事、何故知っているんですか？」

辛島さんが三上弁護士を殴った事を……。」

三谷検事：「そ、それは……。」

裕一：「貴方は辛島さんが三上弁護士を金属バットで殴って気絶させた所を見ていたから。」

そして、その後に貴方自身の手で三上弁護士を殺ったからじゃないんですか！？」

三谷はその場に崩れてこう言った。

三谷検事：「わ、私は何時もアイツに負けてばかりで……。

それで、今度こそはと思つて……この際、不戦勝にしてやろうと、アイツを殺したんだ……。

裁判長、私は三上弁護士を殺害した……。

判決を下してくれ……。」

裁判長は、被告人・兇山 ミチルに無罪判決を言い渡し、証人・辛島 俊之と三谷検事に有罪判決を下した……。

こうして、裁判は終わり、三上弁護士が殺害された事件も解決した……。

帰り道の通り魔（前書き）

前回までは「逆転。判！」のパロディでした。
ここからは本当のミステリの幕開けです。

帰り道の通り魔

P M . 5 : 2 0、裁判が終了し、裕一は自宅に帰ろうとしていた・・。

裕一：「はあ、今日は何か疲れたぞ・・。」
と、独り言を言う・・。

だが、そんな疲れも次の瞬間には飛び去っていた・・。

原因は、曲がり角から出て裕一に近づいて来た男にあった。

男：「た・・た・・助け・・て・・く・・れ・・。」

と、言い残して男はその場に倒れた。

裕一が何だと思い、男を見た・・。

すると、男の腹に包丁を突き刺さした後があった・・。

裕一は男の意識を確認した・・。

しかし、男は既に息絶えていた・・。

まだ犯人が近くにいないかもしれない！

そう思った裕一は、男の出てきた曲がり角の先を確認した。

すると、一人のフードを被った何者かが包丁らしき物を持って走り去って行くのが見えた・・。

裕一：「（と、通り魔！？）」

裕一は、携帯を取りだして警察に電話を掛けた。

そして、暫くすると警察が現場に駆けつけた・・。

裕一は自分の親でもある警視庁捜査一課の裕二警部に事情を話した。

裕二警部：「成る程・・。

それじゃあ、お前が帰ろうとしていたらその角からこの男が出てきて助けを求めて息絶えた。

そして、お前は犯人が近くにいると思ったから曲がり角の先を確認したのだな？」

それに対して裕一は軽く頷いた。

裕二警部：「これはただの通り魔殺人かもしれんぞ。」

通り魔となると、捜査は難航するからな……。」

裕二は嫌な顔をしながら言った。

確かに通り魔は捕まりにくい事が多い。

だからと言って、そう簡単に諦めるのは良くない。

裕二警部：「高木君、被害者の身元を洗ってくれ。」

裕二は、側にいた高木刑事に被害者の身元を洗う様頼んだ。

裕一：「親父、その必要は無くなったみたいだぞ。」

と、口を挟んだ裕一。

裕二警部：「何故だ？」

裕一：「今調べてたら被害者の持ち物から免許証が出てきたんだ。

名前は神代^{かみしろ}鉄也^{てつや}、歳は30。

住所は東京の○市×区 丁目□の5番地……。」

裕二警部：「高木君、被害者の身元は良いから交友関係を洗ってくれ賜え。」

高木刑事は被害者の交友関係を洗う為に現場を離れた。

その後、警察の調べで五人の容疑者が捜査線上に挙がった。

一人目は新田^{にった}隆^{たかし}31歳。

彼は、被害者とは会社の同僚で仲が良かった。

被害者が亡くなった5：30頃には会社で仕事をしていたと言う。

それは会社の同僚が証明しておりアリバイが成立。

二人目は河野^{かわの}美穂^{みほ}29歳。

彼女は被害者の交際相手で警察官であり、裕一のお姉さんでもある。

被害者が亡くなった5：30頃には交番に勤務していたと言う。

勿論、同僚が証明している為アリバイは成立。

三人目は奥山^{おくやま}千春^{ちはる}31歳。

彼女は被害者が中学時代の時に付き合っていた。

また、彼女には窃盗と言う前科がある。

被害者が亡くなった時刻には自宅にいたがアリバイは成立していない。

四人目は如月 春美 30 歳。

彼女は被害者が高校生の時から殺される当日まで付き合っていた。被害者が亡くなった時刻には自宅にいたがアリバイは成立していない。

五人目は栗原 伸介 31 歳。

栗原は、被害者が社長をやっていたタイエーの社員で社長とは仲の良い友人でもある。被害者が亡くなった時刻には職場におり、同僚がそれを証明しているのでアリバイ成立。

裕一：「姉貴がひよんな事で事件に関わるとはな・・・。」

美穂：「そ、そんな事言ったって運命なんだし、仕方ないじゃないの!？」

で、そっちはそっちでまだ探偵続けてんの？」

裕二警部：「ええ、お二方・・・。」

感動の再会の邪魔をして申し訳無いんだが、今は事件の方が先なんじゃないんでしょうか？」

と、裕二が声を掛けた。

美穂：「お、お父さん!？」

何でお父さんが此処に!？」

裕一：「姉貴には言って無かったな・・・。」

親父は一昨年おととしに交番勤務から警視庁捜査一課に移って去年に警部補へ昇進で今年から警部になったんだ。」

美穂：「ふうん。」

お父さんってそんなに優秀な人材だったんだ。」

裕二警部：「ふっ、見たか父さんの実力!」

と自慢げに言う裕二に対して裕一は「警視總監である爺ちゃんのおかげだろ。」と突っ込む。

裕二警部：「お、親父は関係無いわ！」
と言り返す。

裕一：「何言つてんだよ……」

散々爺ちゃんに頭下げて頼み込んでた癖に……」

裕二警部：「そんな事より事件優先！」

早くこの事件を解決してしまおう！」

と、話を逸らした。

裕一と美穂は話を逸らした裕二に呆れていた……。

だが、彼らは何時までも呆れている訳では無かった。

直ぐに冷静さを取り戻し、裕一は捜査に取りかかった。

高木刑事は被害者の事を調べて解った事を言った。

高木刑事：「被害者の神代 鉄矢はタイエーの社長で、人柄が良く

て付近で恨まれる様な事は無かったとの事です。」

裕二警部：「成る程……」

美穂：「ふうん……」

裕一：「だとすると、アリバイの無い二人が怪しい訳だが……。

って、何で姉貴が捜査に加わってんの？」

そう言えば、いつの間にか捜査に加わっている……。

美穂：「何か問題でも？」

大ありだと思っぞ？

第一、これは捜査一課の仕事だ。

交番勤務の警官がする事では無いと思うんだが……。

と言う訳で、三人はアリバイの成立していない二人のアリバイの裏
を取る事にした……。

え、三人？

アリバイ

翌日、三人はアリバイの成立していない奥山 千春、如月 春美のアリバイの裏を取る為の二人の自宅周辺に来ていた。

最初は奥山・・・。

裕二は奥山の自宅の隣の一軒家に住んでいるおばさんに訊ねた。

おばさんは、「昨日は千春さんはずっと家にいて一歩も出ていない」と言った。

アリバイが成立した。

次に如月のアリバイ・・・。

こっちは、近所に住む如月の友人が「春美はいなかった」と証言したので、如月が事件のあった時刻に家にいたかどうかは不明だった。

三人は、如月 春美の所へ行き事件当時にどこにいたかを訊ねた。

如月は、とうとう折れて本当の事を話した。

春美：「私は、銀座のジュエリークラブという所にいたわ。」

裕二警部：「それは何故ですか？」

春美：「仕事だったのよ。」

三人はその証言を確かめるべく銀座のジュエリークラブへ確認に行った。

店員：「いらつしゃいませ。

初めての方ですか？」

ほ、ホスト倶楽部なの！？」

裕二警部：「いや、我々は警察の者でね。

如月 春美さんのアリバイの裏を取りに来たんだ。」

店員：「如月 春美？」

それは何方ですか？」

裕一：「ご存知無いんですか？」

店員：「申し訳ございません。」

当倶楽部にその様なホステスはいらつしゃいません。」

いない！？

ってどういう事だ？

まさか、あの証言は嘘だったのか？

裕二警部：「いないって言うのはどういう意味のいないですか？」

店員：「当倶楽部でその様な名前で仕事をしている人はいないと言
う事です。」

また、お客様の名前にもそれらしき人物はいません。」

如月 春美……。

益々怪しいな……。

少し調べるか……。

裕二警部：「そうですか、お忙しい中わざわざすみません。」

そう言い残し、三人はジュエリークラブを後にした……。

裕二警部：「如月 春美……。

偽名を使ってるのか？

一度、彼女にあつてどういう事が話して貰おう。」

美穂：「そうね。」

って、何であんたが捜査に！

そして、三人は如月 春美に会うべく如月の家に行くことにした……。

春美：「まだ何か用？」

裕二警部：「ジュエリークラブに行ったが君の名前は無かった。」

春美：「ど、どういう事！？

私は昨日はジュエリークラブにいたわ！

どうなってるのよ！？」

春美は内心驚いていた。

何せ自分のアリバイが成立しなかったからだ。

春美：「あんた、もう一回行つて来なさいよ！」

春美は裕二に向かって言った。

そして、三人はもう一度行く事になった。

美穂：「ねえ、私に考えがあるんだけど。」

美穂は、二人に考えを言った。

裕二警部：「それはグッドアイデアだな。

よし、この場はお前に任せよう。」

と言う訳で、美穂が一人で倶楽部に入って行った……。

それから2時間程して美穂が倶楽部から出て来た。

美穂：「アリバイの裏、取れたわ。」

どうやらアリバイが成立した様だ……。

で、問題はどうかやって聞き出したのか？

本人曰く、ホストを口説いて聞き出したんだとか。

まあ、美穂の可愛さなら男なら誰もが全て話すだろう。

裕二警部：「で、ホストの方はなんて言ってたんだ？」

美穂：「何か、如月さんって評判悪いらしいよ。

何時もお客さんから苦情言われていたんだって。

それとね、面白い事が解ったの。」

実は、鉄矢がその常連さんだったのよ。」

どうやらパズルが出来て来たみたいだ。

犯人が拳がるまでもう少しだな。

裕二警部：「鉄矢って……。

それで、他に何か情報は？」

美穂：「鉄矢は、つい最近まで如月さんとそこで仲良くやっていたらしいわ。」

でもね、私が鉄矢と付き合いだした頃から彼女とは余り会わなくなつたのよ。

それともう一つ・

事件のあった時刻に如月さんは出勤していなかったらしいよ。」

ほお、そう言う事か。

裕一：「姉さんはいつ頃から付き合い始めたの？」

美穂：「3日前。」

と、ストレートに答えた。

裕一：「は？」

美穂：「だから3日前だつて。

あの人ね、私の高校時代の友達だったの。

でね、3日前に偶々会って、突然交際を申し込まれちゃったのよ。勿論、私も彼の事は好きだったからその日の内にOKしたわ。」

マジで！？

少し時間置けよ？

裕一：「ふうん………あつ！」

と、いきなり奇声をあげた。

裕二警部：「ど、どうした！？」

裕一：「解ったんだ、神代 鉄矢さんを殺害した犯人が！」

と言う訳で、裕一は美穂を除外した四人の容疑者を呼び出した。

事件のまとめ（前書き）

すいません、此処は本編とは関係無く、事件の捜査結果について簡単にまとめたのを載せてあります。
これを頼りに、犯人を推測してみてください。

事件のまとめ

本邦初公開！

事件のまとめです。

殺害されたのは、河野 美穂（裕一の姉）の交際相手の神代 鉄矢。神代は、銀座のジュエリークラブと言うホスト倶楽部の常連で、殺され日までそこで働く如月 春美と言う女性と交際していたと言う。また、その後の捜査で殺される二日前に美穂と付き合い始めたと言う事が解った。

死因は腹を刺されての死亡。

犯行時刻はPM・5：30頃。

そして、捜査線上に浮かんたのは美穂を除外した以下の四人の容疑者。

新田 隆にった たかし 31歳。

彼は、被害者とは会社の同僚で仲が良かった。

被害者が亡くなった5：30頃には会社で仕事をしていたと言う。

それは会社の同僚が証明しておりアリバイが成立。

奥山 千春おくやま ちはる 31歳。

彼女は被害者が中学時代の時に付き合っていた。

また、彼女には窃盗と言う前科がある。

被害者が亡くなった時刻には自宅におり、近所の住人の証言によりアリバイが成立。

如月 春美きげい はるみ 30歳。

彼女は高校生の時から被害者と付き合っていた。

また、その後の調べで、被害者は殺される二日前までジュエリーク

ラブに如月目当てで来ていたと言う事が解った。

被害者が亡くなった時刻には銀座のジュエリークラブと言うホスト倶楽部で働いていたと本人は証言したが同僚はその時刻にはいなかったと証言した為アリバイは不成立。

栗原 伸介 31歳。

栗原は、被害者が社長をやっていたタイエーの社員で社長とは仲の良い友人でもある。

被害者が亡くなった時刻には職場におり、同僚がそれを証明しているのでアリバイ成立。

以上の事から考えると、被害者は殺される二日前の日に、如月と別れていると言う事が解る。

と言う事は、犯人はもうあの人に決まりだ！

事件のまとめ（後書き）

次話から事件の真相に迫ります。

容疑者指名、まさかの大逆転！？

裕二の手配により四人の容疑者が集められた。

隆：「は、犯人が解ったって本当ですか、刑事さん！？」

と、新田が驚きながら言った。

それに続いて、奥山も驚きながら「誰が殺したの！？」と言った。

更に、如月と栗原も驚いている。

春美：「ねえ、貴方はこの中に犯人がいると思ってるの？」

裕一：「ええ、犯人は間違い無くこの中にいます！」

伸介：「面白そうだな。」

君の話聞かせてくれないか。

皆もこの名探偵の推理ショー聞きたいでしょ？」

千春：「勿論じゃない。」

是非聞きたいわ。」

裕一は推理した事を話し始めた。

裕一：「先ず、事件は神代 鉄矢さんが殺害されたと言う事ですが、最初の捜査では通り魔の犯行だと思わされていました。」

しかし、これは犯人によって巧妙に仕組まれた計画殺人だったのです。」

全員が驚く。

裕二警部：「それってどう言う事だ！？」

ただ殺害するんならそんなに計画的に犯行を行わなくても良いだろう？

それとも、通り魔の犯行に思わせる必要があったのか？」

裕一：「その通り、犯人は自分を警察の疑いの目から遠ざける為に通り魔の犯行の様に思わせたんだ。」

事件のあった日、恐らく被害者は殺される二日前に付き合い始めた女性に交番へ会いに行く予定だった。

あの道は交番へ行く道ですからね。

そうなんですよ姉さん？」

美穂：「うん、あの日は鉄矢と会う約束をしていたわ。」

春美：「そ、それじゃあ……。」

美穂さんが彼を？」

待て待て、そんな事は誰も言っではない。

美穂：「待つて、何であたしが殺さなきゃいけないのよ!？」

裕一：「姉さんは神代さんを殺してなんかいませんよ。」

それに、姉さんにアリバイがあるから殺害は無理だ。」

春美：「でも、何かトリックを使えば可能なんじゃないの？」

裕一：「では、そのトリックは何ですか？」

春美：「例えば……予め交番の同僚に話を合わせる様をお願いをしてから殺害現場に行き、鉄矢を殺害してから交番に戻り、後で呼び出された時にこのこと現場に戻ってくる。」

そうすれば美穂に殺害は可能よ？」

如月の奴、美穂に全ての罪を着せるつもりなのか？

裕一：「確かに、その方法なら姉さんにも殺害は可能です。」

しかし、それならアリバイの無い貴方はどうなんですか？」

春美：「待つて、私にはジュエリークラブにいたと言うアリバイがあるわ。」

裕一：「本当にそうですか？」

実は、貴方のアリバイが崩れたんですよ！

ジュエリークラブで聞きましたよ。

事件のあった日はクラブには出勤していなかったそうですね。」

春美：「そ、そんなの、同僚が私をはめようとしているだけよ!」

裕一：「そんなのはどうでも良い事です。」

今は事件の真相について話しているんです……。

犯人は如月 春美さん、貴方ですね？」

皆が驚く……。

春美：「待つてよ、私は鉄矢を殺してなんかいないわ！

殺したのは、そこにいる美穂よ！

私、見ちゃったの。

一昨日、美穂と鉄矢が争あつっている所を。」

こ、これは最大の武器だな。

こんなのも用意していたのか・・・。

美穂：「確かに、彼とは一昨日言い争あっていたわ。

でも、そんな事で殺そうなんて思いはしないわよ。」

その通り、美穂は殺害なんてしていない。

春美：「それじゃあ、美穂の手提げ鞆てさげかばんの中に入っているのは何？」

裕二はおもむろに美穂の鞆を取り上げて中身を確認した。

すると、血の付いた包丁が入っていた。

つて、何で入ってたんだ！？」

裕二警部：「美穂、これはどういう事だ！？」

裕二が半分怒りながら言う。

美穂：「こ、こんなの知らないわ！？」

一体、誰が入れたのよ！？」

春美：「とぼけても無駄よ。

私、見ちゃったんだから。

貴方がその包丁で鉄矢を殺した後、その包丁を鞆にしまった所を。」

な、何！？」

どういう事だ！？」

犯人は如月じゃないのか！？」

それとも、今までの事で何か見落としていたのか！？」

裕一：「・・・・・・・・・・。」

裕一は反論する事が出来なかった。

こんなにも証拠が揃そろっているには弁護のしようが無い・・・。

裕一：「（こ、ここで落ちたら終わりだ。

ここはせめてハツタリで誤魔化そう。）」

裕一はそう思っおもってハツタリで誤魔化す事にした。

裕一：「それは、貴方が姉さんに罪を着せる為にこっさり入れた物なんじゃないんですか！？」

春美：「はあ、何？」

貴方は私が犯人だつて言うの！？

ふざけないで！

私は殺してなんかいないわ！

それに、凶器なら美穂の鞆から出て来たじゃないの！

犯人は美穂で決まりよ！」

そこへ、高木刑事が言い知らせを持って来た。

高木刑事：「警部、害者の体内からジュエリークラブのマークが入ったボタンが出て来ました。」

ボタン！？

これは起死回生のチャンスだ！

裕一：「如月さん、このボタン・・・貴方ですね？」

春美：「な、何を証拠に！？」

裕一：「如月さん・・・。」

まだお分かりになりませんか？

このボタンは被害者が最後に残したダイイングメッセージなんです
よ！」

春美：「ど、どういう事！？」

裕一：「これは、神代さんが貴方に殺^やられた事を伝える為に、貴方の服からボタンをちぎって飲み込んだ物です。」

如月さんの服の右袖のボタン・・・どうして取れているんですか！
？」

如月は、全てを認めるかの様にその場に膝を付いた・・・。

春美：「わ、私が殺^やりました。」

私、あの人が許せなかった・・・。

全ては事件の二日前・・・。

彼は毎日来てくれたわ。

でも、その日から突然来なくなつたの。

それで、次の日に何故来なかったのか確かめようと思って、彼の家
に行つて待ち伏せをして彼の跡を付けたわ・・・。

そしたら見たのよ。

彼が美穂と会っている所を。

彼だったら、美穂とキスしてたわ。

あの時はばかりは裏切られたと思ったわ。

その時に殺意が芽生えたのよ。

だけど、ただ殺すんじゃ面白くないと思って美穂に全ての罪を着せてやろうと・・・。

全て完璧だと思ってた・・・。

でも、結局最後にはバレてしまうのね・・・。

探偵さん、全て貴方の言う通りよ。」

裕一：「人の物を盗む奴はもつと大事な物を無くす・・・。

貴方は人の命を奪ってしまった・・・。

それが災いして人生の道を踏み外してしまった様ですね・・・。」

如月は泣き出した。

春美：「う・・・うう・・・う・・・う・・・うう・・・。」

高木刑事は、如月に手錠を掛け、パトカーを乗せ様とした。

裕一：「待って下さい、まだ全ての謎は解けていません・・・。」

春美：「え？」

裕一：「包丁ですよ・・・。

なぜ姉さんの鞆に？」

春美：「そんなの簡単よ。

鉄矢を殺した後に交番に行ったの。」

そこで美穂の鞆に血の付いた包丁をこっそり入れたのよ。」

裕一：「交番に行ったんなら、何故その時に自首をしなかったんですか？」

春美：「それは、高校の時に、美穂から酷い目に遭わされたからかな。」

私、心のどこかで美穂の事を恨んでいたのかもしれない・・・。」

そう言ったつきり、如月は黙ってしまった・・・。

美穂：「春美、ごめんね・・・。」

美穂は如月に涙を流しながら謝った。

春美：「花は全ての女性を輝かせる。

そんなに泣いてしまつては、せつかくの美貌が台無しよ？」

確かにそうだ・・・。

美穂：「そうだね・・・。」

美穂は涙を堪えながら如月を見送った・・・。

容疑者指名、まさかの大逆転！？（後書き）

正直自分で決めた設定に焦りました。

何せ、美穂に罪を着せて良い物なのかと・・・。

所で、皆さんはどの辺で犯人に気づいてましたか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6188a/>

河野裕一の事件簿！ 3殺目

2010年10月9日21時53分発行